

総合討論

座長（西莚）：それでは総合討論を始めます。今回の特別講演の演題は「北海道畜産の未来を考える」で、私なりに判断すると未来に強めのアクセントがかかっているような気がします。昨日から水間先生が「畜産の課題を考える」ということで主として国際化と日本農業、その中における畜産の意味あい、さらには日本型畜産の構築と課題とか環境問題についてきわめて哲学的な基本的な問題について講演をお願いしたわけです。そのあと宍戸先生の方から技術論について、具体的に北海道あるいはイギリスなどの比較論にたつて議論を展開し、牧草の反収あるいは家畜管理の比較といった具体的な問題点の指摘をもらいましたので、ここを解決していかなければ北海道の酪農の未来は展望が開かれていかないんじゃないかと結論されたような気がしております。さらに最後には、今日当事者の天間先生がいらっしゃるんですが、「新農政プランと北海道酪農の発展方向」ということで講演を頂いて、昨日はかなり白熱した議論をちょうだいしたわけでありませう。

メインテーマは「北海道畜産の未来を考える」ということで未来にアクセントをおいて考えると、やはり水間先生の主張、それから二番目がちょっと順番を変えて天間先生の「新農政プラン、そして技術論として宍戸先生というのがストーリーとして無理が無いんじゃないか」という気がしております。こういうような考え方を骨子にして、これから三人の座長で今日のシンポジウムを進めていきたいと思っております。まず、宍戸先生と水間先生に昨日言い足りなかったことあるいは他の講師の方のお話を聞いて、ここはどうも私の主張と違うのではないかということ

一人10分ないしは15分くらいで補完説明かどうか分かりませんが、もう一回御講演頂いて、その後、今お話したようなストーリーを作り上げるような考え方、脚本でこれからシンポジウムを三人の座長で進めていったらいいんじゃないでしょうか、そういうふうにご検討しております。それでは水間先生、宍戸先生の順にお願い致します。

水間：今日お集まりの方々はいろいろな職種の方がいらっしゃるようです。大学にお勤めの方もいらっしゃるし、実際に試験場で業務を担当なさっている方もいらっしゃるようです。昨日私がお話いたしましたようなことは、皆様方から言わせれば、そんなことは当り前のことだと思われたと思うんですけど、逆の言い方をすれば、現実に今酪農あるいは肉用牛をどうするかということに心を悩ましているときにそんな話をされたところで何にも直接的な役には立たないということだろうと思うんです。ただ、私が申し上げたかったことは、常に現実対応ということをお我々は迫られている。その現実対応をクリアーしていこうということで一生懸命やってくるんだけど、そのこと自体が自分の首を絞めることになりはしないか。我々はもう少し先を見て、現実対応は現実対応としてしていかなければならないけれども、同時に将来に向かってどういう対応を考えなければいけないか、ということをお申し上げたかったことなのです。

私の認識としては、一番深刻に考えていますのは、現在バブルの崩壊、経済の崩壊ということでおわたくしは、なんとかして景気を補

強しなければいけない。例えば地価がどんどん下がる、金融機関はみんなめっちゃめっちゃになる、これを何とか支えなければいけない。株が下がる、株を何とかしなければ経済はどうにもならない、そういうことで必死になっているというような状況です。そのこと自体が、如何に日本の将来ということを、本来の姿で発展すべきでないような発展の仕方がもう一度来てくれないと困るというように考えているとしか思えないわけです。そういう中で農業、農村の問題を考えていきますと、昨日もお話でしたが、農業のGNPはせいぜい2%以下だ、だから産業的にいっても重要な問題ではないんだという発想につながってきます。実際に農業総生産というのは12兆円ぐらいということになる、GNPから言うとも2%である。それはフローなんです。ストックのことをちっとも言っていない。つまり、フローと言うのはどれだけお金として計算され、それは生産物でどれだけというような考えだけで、農業自体があるいは農村が果たしているストックとしての仕事ということ、具体的に申しますと、食料生産ということではなくて、国土の環境保全の仕事であるとか、あるいは我々の生活を、昨日天間先生が農業、農村の役割には5つあるとお話になりましたけれども、食料生産を除いたとしても、国土の環境保全であるとかあるいは地域の農業を活性化しているものであるとか、それから教育、文化の問題であるとか等々の問題について少しも評価しない。みんなただなんですね、すべて。2、3年前ですけれども、東京で大変な水不足な状態にありました。あと一週間雨が降らなければ断水だとテレビなんかでもしょっちゅうでできました。というのは、東京圏に100km圏に3500万もの人がひしめいている。それは世界で一番高いアクティビティを持った経済活動が行われているということで、そこにいけば、なんとか雇用の機会

があるということです。それで、毎年大体25万人の人が集まる。これが東京一極集中と言われる現象ですけれども、一方で、3300の市町村の4割が過疎になっている。

こういう状態が続いているわけです。しかし、東京圏のことを具体的に考えてみますと、東京圏の人々の生活の基礎となる水の問題を考えたときに、今までは東京の水でしたら、多摩川の上流にある小河内ダムであるとかそういうダム一つでありましたが、昭和40年頃から水が足りない足りないということで、利根川水圏に7つのダムを作った。つまり、東京圏に住む人々は関東地域全域に降る雨によってそれを賄うということではなければならないというわけです。しかも、雨が降って、それが全部地表水で流れてしまったらもう駄目で、やはり、森林で受けとめ、水田で保水し、そして地下水として溜め、それが少しずつ外に流れ出して、川の水として流れていくというシステムができていなければならない。それじゃ森林とか水田とかがそういう機能を持つのは誰のおかげか。そこに住んでいて、林業に携わり、農業に携わっている人々が日々の仕事としてやっているからこそできる。しかし、そういうことを生産費に反映したことはあるか。林業の人たちに都会の人たちのために水を保水しているということで、木材のお金にそういうことがカウントされているか。お米にもそういうことがカウントされているか。されていませんね。それはただである、当たり前だということになっている。けれども、自分たちの水を溜める人、使う人というふうの流れで考えれば、使う人たちは自分たちの生活の基盤である最も大事な水というものを保証してくれる人たちが何をしているから、自分たちがそういうことを安全にやっていけるのかということを考えて、当然の支払をするべきだというのが私が考えるところであります。そういうことが

ストックなんです、そういうことは少しも言われないうちです。だから、米の輸入自由化などという問題をとらえると、安いから結構じゃないか、こういう話になるわけです。牛肉自由化の時はどうだったかという、乳牛が210万頭、肉用牛が270万頭、480万頭の牛が飼われて、1兆3千億円の生産をあげて、農業総生産の12%をあげているんだ。しかも、そのことによって、山林里山の開発、農山村の振興、地域農業の発展、そして、水田の減反の受け皿というような大事な仕事をしているのが、我々の肉用牛生産、酪農も含めた生産である、ということはいわれなくて、外国に比べたら牛肉が、アメリカに比べたら4倍高い、オーストラリアに比べたら6倍高い、そのことだけが言われて、そして輸入しなければ駄目だ、こういうことをマスコミが一生懸命言う。少しもさっきのようなことを、山林里山の開発といったようなことをやっている重要な仕事ということについてはちっとも言わなかったではないか。現在の米の問題もそうですが結局アメリカに比べたら高い、外国に比べたら高いということだけが言われてきた。しかし日本の農業というのは、我々の祖先が我々の国の自然条件に最も適するような形の農業を打ち立ててきた。そしてそれが結果として420万戸、1.2haの農業であるんだ。それに比べて、ECは、大きさいろいろありますけれど、750万戸、16haであり、アメリカは220万戸、185haの農業として存在する。これを今、規模の論理だけでもって問題にしているわけです。アメリカに比べて日本の、例えばアメリカの水田の規模であれば100-150haになっている、それに比べて1haの農業を比べてどっちがものを安くできるかと言ったらいわずとしれたことです。アメリカのそれだけの規模の農業というのは、コロンブスが500年前にアメリカを発見したということが今年の500年祭という

ことになっているわけでありましてけれど、皆様ご案内の通り、コロンブスは非常に良いことをしたということではなくて、今はコロンブスその人がアメリカを発見した後の歴史を考えるなら、功罪というのはいかがということが言われていると思うんですね。NHKのテレビなんかでも、彼が北米大陸を発見して以来先住民を400万人とも500万人とも虐殺したと、そういうことをしたからこそ現実にそれだけの規模の農業を作ることができたんじゃないのでしょうか。そういうことを抜きにして、日本が零細規模であることをけしからんと、そういうふうにも言っても良いのだろうか。それぞれの国はそれぞれの自然条件とか土地の条件に合わせて、いかにして太陽エネルギーを有効に利用して多くの国民を養うのかということと農業を発展させてきたのではないか。そのこと自体をどう評価していくのか、それをどう考えていくのか、ということ抜きにして、牛肉や米のことが言われている。今年6月に出されました新しい食糧、農業、農村政策、新農政プランで言われているのは15ha、20haです。どんな計算してもしかも農水省の言っているのは現在の生産費が二分の一になる程度です。タイとかアメリカに比べたら、今日本の米の生産費というのは、アメリカに比べて6倍高い、タイに比べて10倍高い。それが3倍なり5倍になるという程度でしかない。一生懸命やっても、規模拡大しようとしても、それはそういう歴史を背負っているからだと思うんです。そして今、農業をやっている人というのはどんどん減ってきますし、農村人口も減ってきている。東京の人なんかは3代先までずっと東京に住んでいる人を江戸っ子というんだそうですけれど、その今の東京の人たちで、本当の意味の江戸っ子というのは非常に少なく、ついこの間農村からでてきた人達、その人たちが都会に住み着いているわけだけど、今その人

私たちは農業の問題というのは殆ど考えていないという状況になっているのだと思うんです。そしてこのままでいけば、産業構造、GNPの比で言えば、2%以下の問題ではないか、酪農でいえば5万戸の酪農家、肉用牛でいえば21万戸の農家、携わっているのはそれだけじゃないか。6人とか7人とかという家族人口をかけても大体27万戸として150万人ではないか。1億1千2百万人の人口の中で僅か150万人のためにこんなに保護しなくてはならないのか、というふうな言い方をすぐするわけです。けれども、1兆3千億円の生産ということを申し上げましたけれども、それ以外に今農業、農村がしていること、先ほど水の問題で申し上げましたけど、そういうことを通してと同じように、森林とか水田がなかったらどういう事が起こるか、あるいは逆にいえばそういうものが果たしている機能というものをカウントしたら一体どうなるか。こういう事で計算されたのは、昭和55年、ちょっと古くなりますが、農水省の計算では水田が12兆円、森林が24兆円で36兆円でしたが、そういうストックの仕事を考えますとGNPの約10%になるんだ。それだけの大きい仕事をしているということを考えないで、ただフローの事だけで問題にしているということが問題になってくるのではないかと、こういう事なんです。そのように我々国民の生活の基盤を保証している農業、その中でも重要な地位を占めた作物としては、米よりも大きくなった日本の畜産、約30%でありますけれども、その畜産というものを守り育てる、衰退させるのではなく、発展させるということは、国民のためにも非常に重要ではないか。そういう基本から物事を考えていく必要があるんじゃないか。そして同時にそういうものを考えていくためには日本の農法がどの様に発展してきたのか。そういう中で、昨日も申し上げました船津伝次平というのは日本の百姓の本

分は米を作る事だといった。つまり迂回生産しての畜産をやるよりは、直接食べる米を作る事の方が大事だといった。そういう国柄であったけれども、現時点で戦後に於いてやっと畜産が根付いてくるような状況になってきている。それも、最近の状況の中では、餌とかそういう事で考えますと、例えば、外麦と日本の麦とを比べたら、6倍も高いじゃないか、だから日本で飼料の生産は止めてしまって、全部外国の餌で依存すれば良いんだ、こういう事になっているわけです。しかし、そういう事をどう考えていくのか、それでよろしいのか、もうちょっと先の事を見たならば、そういう問題も含めて、我々はもう一度日本の畜産のあり方というものを考え直してみる必要があるんじゃないか。特に北海道の場合には、土地利用型の畜産ということで、肉用牛でしたら日本全体の約2割を占める、乳牛では約4割とかなり大きな部分を占めているんです。まさにこれから日本の畜産のモデルとして発展される所ではないかというふうに思うんです。そういう事で昨日私が申し上げたことは、今のままで進んでいくと日本の農業、農村はつぶれてしまう。昭和40年には6万5千人の後継者がいたのに、現在、去年で1800人、その前は2100人となっている。3300の市町村で、中高卒で農業に残る人はもうこれくらいになってしまっている。こういう状態なんです。それで、農業、農村が崩壊してしまったらどうい事が起きてくるだろう。日本の繁栄もできないだろう。そしてよく国際貢献ということが言われますけれど、日本の経済はこれだけ発展したのだから国際貢献せよというふうに言いますけれど、日本の基盤が崩壊して国際貢献も何もないのではないかと。いささか乱暴な言い方をすれば、まさにそういう事ではないかと、原則論みたいな事を申し上げたわけです。そういう事を一つ皆様方もどうお考えになるのか、逆に

皆様方に今の日本の状況というのをどうお考えになられているのかということをごちらの方からお伺いしたい。

今日は少し論議を巻き起こすためには、皆様方の方からもご意見を言っていただきたい。

座長 (西埜) : 水間先生どうも有難うございました。期待に答えるべき、宍戸先生のお話が終わってから討論に移りたいと思います。それでは宍戸先生宜しく願います。

宍戸 : いま、水間先生から日本の畜産あるいは農業を考える場合の基本的な考え方、私もそういう事について話をするかなどうかなと思ったんですけど、たぶん水間先生がおいでになればそういう話をするに違いないですから、昨日はかなり技術的なものに限定して話をしようと考えたわけです。北海道の畜産は技術的な面からいけば少なくとも昨日お話ししましたように生物学的という能力的な表示、例えば乳量等の話になってきますと、別にECに劣るとかじゃなくて、かなり世界のトップクラスになっているわけです。日本の中でも特に北海道はそうですが。そうはいつでも北海道の農業、畜産の中にも欠点はあるんじゃないかということ、一つは労働生産性ということ、畜産経営学者の方から指摘されて、それが例えば日本の北海道の畜産をどう考えていくかという酪総研の提案の中にも、具体的には言わないけれども、そういう要素が盛り込まれてきている。そうすると、やはりその辺りの考え方というのは北海道の畜産を考えていくときのポイントになってくるんじゃないかということ、昨日お話ししたわけです。それからもう一つ、あの議論の中ではいかなかったんですけど、私が畜産の技術開発に携わってきたときに、比較的生産力をあげたというインデックスでいろんなことを判断して

きたわけですが、それが、全体としてできあがったものを、もう一つの労働生産性という格好で見るという視野が私にはあまりなかったのです。ひょっとしたらここにおいでの方の多くの方もそういう視野がなかったかもしれない。とすると、これからは、開発の中にそういう要素も一つのクリテリア (criteria) といいますか、ポイントとして考えていく必要があるんじゃないかということに合わせてお話したかったわけです。ただ、昨日水間先生も言われたんですが、実はこれは必ずしも、例えば30時間が良いんだ、60時間がけしからんということではなくて、日本の酪農家それ自身が持ってきた労働に対する考え方が基本にあるわけです。ぶらぶらしているよりは少しでも畜舎の中をまわって、少しでも餌をやってというやり方をすれば、必然的に畜舎にいる時間が長くなり、それは労働時間としてカウントされる。もしそれを除いたらどうなんだという話もあって、いわゆる経済的な意味での労働時間という非常に割り切った考え方だけじゃないかもしれない。そういった面もあるのではないかということ、視野にいれた方が良いんじゃないかということ、昨日お話ししたわけです。

実は、その資料は畜産経営の方々が出された資料なんですけれど、そういうデータを使うとき、必ずそれぞれの国の統計資料を使っていたわけです。日本なら日本のいろいろな統計資料を。それを切口が違うから比較するために計算をし直す、再構築して比較をしていく。ただ、その出て来る数字というのは、例えば昨日も北海道の50頭平均はいくらであるという平均値、平均値が実際の農業技術の中でどういう意味を持っているかということ、これはまた話が別なんです。私もあえてそういう事はいわないで話してきて、いかにも北海道は全ての人が全く同じような経営で、全く同じような格好で、全く同

じような搾乳時間でやっているというような形でしゃべっていたわけですけど。実は、必ずしもそれは実際の姿を伝えているかどうかというのは、そういう提案があったときに、私どもの方で考えなくちゃいけない問題、いわゆる数字だけが一人歩きして行って、その裏にあるのが実態いわゆる農家の人の考え方、酪農家の考え方、あるいは肉牛生産でもいいですけど、そういう人達の考え方を本当に反映したか。

実際に現場、北海道なら北海道、イギリスならイギリス、オランダならオランダの現場をかなり見てきた人がこの数字を見ると、あるいは違った見方もできるかもしれない、というような気がするんです。そこまで私は経験もありませんので、そういう数値をそのまま使ってきたということでありまして。こういった考え方、先ほど言いましたが、ただ私達技術者の中に抜けている視点があるとすれば、そういう所をこれから考えていかななくてはならない。そういう所かなということでお話したわけですけど、これはやはり肉牛の農家についても私ども言えるだろうと思いますし、その他の事についてもこれから考えていった方が良くないかと言うことで、あえて、酪農に限定させて頂きましたけど、お話したということです。

水間：先ほどちょっと言い落としてしまったんですけど、昨日お話ししましたときにこれからの畜産技術の展開方向というのは時間がなくなりまして全く省略してしまいました。実は、先ほどのような問題意識の下で、私は日本の畜産の近未来をどう考えればいいのかということで、3年ぐらい前に新畜産研究会というのを作りました。私が40年東北大学におりましていろんな方とおつきあいさせて頂いたものですから、そういう方々をお願い致しまして、この機会に日本の畜産の近未来をどう考えるかということ

少しまとめてみよう、つまり、生産、流通、消費の全ての畜産にかかわる課題を一つ取りあげてみよう、ということで、当時畜産試験場の企連室長でいらした宍戸さんの所にいった。それと、家畜試、それと草地試験場にいった、こういう事をしたいから若い人にそういうものを書かして下さい、ということでお願い致しました。ところがそういうわけにはいかないというので、全部長さんに24名の部長さん達にそれぞれの分野についての技術の開発と発展方向ということをおまとめ頂いた。それがここに「畜産の近未来」という本としてできています。もしよかったら是非読んでいただきたい。いろいろな問題をそれぞれの立場の方に書いていただきましたので、座右においていただければというのが本の始めに書いてあります。終わりの方には、家畜の諺なども、日本人の暮らしと家畜ということもサービスしております。この中にはそのような情報も込めましたので、このことを昨日申し上げたかったんですけども、とても時間がありませんで申し上げられなかったということでございます。

それからもう一点は、いわゆる自由貿易、国際分業、あるいは比較生産費税というのは、農業では通用しないんだということを申し上げたかったわけです。今、日本では年間に1200万台の自動車を作っております、それを約630万台くらい外国に送っている。毎日1万8千台、つまり6千台づつ積む船を3隻づつ365日切れ目無しに外国に送っているというような状況です。ですからそれが貿易摩擦というようなことになるし、アメリカでは自主規制ということになっていく。工業の論理というものを農業の中に持ち込んでいるというのが今のあり方だと思うんですが、それはうまくいかないんじゃないか。つまりガットのウルグアイラウンドもそう

ですが、アメリカの立場というのは、非常に生産性の高い農業をやっている国のものを買うのが当たり前だ、だから日本にも米の自由化せよ、牛肉も自由化せよとっておるわけです。それは、それぞれの民族存立の基盤である農業を破壊してしまうことになるんだということを本当に強く意識させるわけです。昨日天間先生にもお話伺ったわけですが、乳製品に関する問題にしても、国際競争力というのはつけなければいけませんけれど、どうしても日本の自然条件とかそういう中では太刀打ちできない面はあるわけです。そういう問題については補強措置というのは必要なことではないかと思うわけです。

座長(西莖)：どうも有難うございました。それではこれから討論にはいりたいと思います。最初に座長団の方から指名させて頂きたいと思えます。総論的な問題、主として水間先生の方になってくるような気もするんですが、普段、転勤、視察などの多いホクレンの西部さんからコメントを頂きたい。西部さんが終わりましたら、最近農研センターの方から北農試の畜産部長になりました伊藤さん、このお二人から簡単にご提言頂いて、そのあと賛成なり反対意見等を皆さんの方からちょうだいしていきたいと思えます。それでは西部さん、伊藤さんお願い致します。

西部(ホクレン)：全国あちこち動かされた場合、九州、四国あるいは関東を見てきて、北海道の特に畜産の場合に、これは日本全国でも言えることなんでしょうけど、肉牛なんかの場合かなり歴史がそれぞれの地域にありますし、繁殖を中心とした小さな規模ですけど、府県にはそういう歴史があるわけです。北海道の畜産の中ではそういう歴史を持っているのは実は豚なんです。

それから酪農なんですけど、肉牛は余りそういうのがない。ただ、酪農について言えば、かつて酪農が始まった黎明期の時は、戦前の話ですけど、実はそこでは牛しか飼えない、稲を作ったけどどうも稲ができない、従って牛でも飼わなければいけない状態だった。それで、牛はなんのために飼っているのかというと、もちろん売る場合もあるんですけども、自分の生活というものが一つ有りながら牛を飼っている。農業をやっている原点というのはその辺から始まるだろうと思います。昨日の宍戸先生のお話にもあったように、イギリスあるいはオランダと日本を比較するとき、比較論をやる基準を、確かに生産性をまず比較することもあるんですが、生活なり、畜産の歴史、民族、その民族が持っている畜産に対する生活スタイル、そういったものを多分にみなくてははいけないし、北海道の酪農を考えると、そういう場面からいくと、いわゆる国際競争力といったことを言うときも、本当に力があるんだと、土に根ざしているんだ、北海道に根ざしたことをやっているんだと、そこがちゃんとしていないと、人真似というか、外国の真似だけですと個性がありませんから、当然その大きさとか生産性だけで議論される。そこで、なぜ牛を飼っているんだということ、生活があり、牛を飼うことの楽しみがあり、そういう事になる。それがひいては、昨日天間先生が言ったような5つくらいの機能がありますよと、今の意識で言えばそういう事なんです。そこでは農業の原点、畜産の原点は同じだと思うんですけど、生産と生活、それが密着している。それが、生産性を高めていくと生活と離れる。国全体としても、農業が生産性、生産化ということですから、農家の中だって子供は農業の事をよく知らないということが起きてます。畜産をやっているところの子供達が我々の小さいときには乳搾りをやったものですが、今度機械で

すからあまりやらなくなった。普通の家庭よりはするでしょうけど。基本的にそういう問題がある。私は北海道の農業あるいは北海道の畜産は反省の畜産だ、反省の農業なんだ、だからこれをなんとか根ざしたものにしていけないと、国際競争なんて話にもならないということをよく言うんですけど、いまもそう思っています。そこで畜産の全体の流れで心配しているのは、そんなこと言うと理想の話で希望の話だという感じがしないわけじゃないんですが、それは何かと言うと、鶏の分野がご案内の通り企業養鶏が今や日本の主流を占めている。生産性という話でいくとそうなんです。豚もそうなんです、北海道で言えば、繁殖が200頭以上の経営体は5%くらい、豚肉の生産のシェアは95%占めている。もう豚もそうになっている。それじゃ乳牛はそうなるのではないか。その次のステップは乳牛だ。そうなるもまた農政振興から企業まではいきませんけれど、法人枠の生産を伸ばしていけないと確かに生産性では日本は国際的に追いつかないんだと。そのほうがより経営的な考えでは伸びる可能性というか、太刀打ちできる、国際競争できる可能性も持っているということが一方にあります。そこで私ロシアによく行くんですけど、その典型がロシアです。ロシアの農業はご案内の通り農業の工業化を進めてきた。日本流に言えば1町村1経営体です。従って搾乳牛で言うならば、一番小さな経営体でも1600頭ないしは3000頭くらいの搾乳牛を持った経営体、これがソホーズです。

彼らは公務員、ソホーズは公務員ですから、牛の飼い方としては資本主義型で経営をすれば、これはまさに企業になるわけです。ああいうものが日本の国にできないとは限らないし、それを見てきた目から言うと、効率を追っていったら、300、400から1000頭ぐらいまでの経営体はできないとは限らない。そのほか、休

日をとるということも含めて皆さんそれを追っているわけですから、そうしたらその方が合理的でないかということになります。そうすると、農業の先行きというのを私なりに考えたら、原点からいくと、農業の持っている機能の内の生産という機能は確かにいるんですけども、教育的機能とかあるいは環境の保全的な機能とかそういういったものが国全体としておかしくなっている。日本全体で今おかしくなっているんですけど。それが農業自身、畜産自身の中からなくなる。それに対し家族経営というものを大きく指向し、その中に生産と生活あるいはその中に教育、環境保全というようなものが一つの経営の中で運営されるような、そういう経営体はどんな事になるのかということ、しっかり我々詰めていっているだろうか。

一方では企業的なものあるいは共同経営、有限会社といったものがあるとして、それに対立するような形における酪農の経営の姿ってなんだろう。それをしっかり詰めているだろうか。技術的にいろいろなことをやって頂いているけれども、それは経営としてそれぞれ生かされないと、トータルとして生かされなかったら、システム化されないと意味がないわけですから、そういう点からいったら、昨日宍戸さんからお話があったように、我々技術をどうすればいいのかという話になる。それはまさに一つの経営モデルといったものを作っていかななくてはなかなか出てこない。そういう点からいくと、国公立がそれを狙うべきではないかと私は言うわけですが、じゃ、狙ったとしてそういう事ができるような場があるのだろうか。個々の技術が研究されなきゃいけないとなってくるんで、ちょっとその辺の技術の総合化のあり方としておそらくアメリカもそうだし、EC諸国もみんなそういうふうになっているんですけど、それぞれそういう経営のレベルまで技術をおろして、そ

れから普及といった流れ、そこがどうも日本は欠けている。そういうビジョンを持つとすれば、家族経営の方向に対する計画が一方の企業的あるいは法人的な生産よりも、よりベターというのはそこで狙えるんだと。酪農についてそれをしっかりやっっていかなければいけない。今、鶏、豚の事は非常に粉糾しているんですけど、それが乳牛もそのような流れに入っていく。それで、水間先生が言ったように、大変な公害が、そしてそれが活かされなくなるという心配をしながら、そこら辺をどうみんなで打ち合わせていくか、またそれをしっかりビジョンとして持ちながら、いろんな技術開発あるいは技術総合化に集中していく、そこを真剣になって、まさに地についた酪農の経営の組立をぜひ構築する必要があるんじゃないかと思っております。

座長（西埜）：どうも有難うございました。では、次に伊藤さんをお願いします。そのあとに先生方何かありましたら簡単にお願ひ致します。

伊藤（北農試）：7月に北海道にきたばかりで、外からみた比較、今まで全然北海道に住んだ事がないので、その目でみたお話をしろということだと思います。ここにくる直前は農業研究センターにいて、ここは畜産関係の研究室は統計科学だけで、あとは米とか麦とかそういう方面で、いくなれば情報のような事をやっておりましたのでちょっと話がほけるかもしれませんが、昨日からのお話伺っていて、水間先生と宍戸先生の話を経合すると、こういう事を言われたんじゃないかと思う。今までは余りにも現実対応型なわけで、例えば技術が出てきても、すぐ役立つとか役立たないとか、評価だけを積み上げるようになりすぎて、つまり木を見ていても全然森を見ない格好で農業技術あるいは農業発展を考えてきた。工業的な発展という表現かもし

れませんが。それに対応するのに個別の技術をシステム化して考えてみなくちゃ駄目だと。そのシステムも単なる畜産とか酪農とかいった個別作物だけのシステムではなくて、もっと世界規模といいますか、大きなシステムの中に組み込んで評価しないとイケないんだという話と、それと評価の段階でも評価の基準というものが、効率とかだけ、単純というか単一的な評価基準だけで走ってくるという時代は終わって、評価基準の多様化というか、いろんな形の評価基準というのを頭におかなければいけないわけです。それが、今後の日本の畜産の、あるいは北海道の畜産もその中にはいると思いますが、発展のキーになるんじゃないかというお話だと感じました。これは大変有意義なというか有用な御指摘だと思います。ただ一つ、御指摘のように、どちらかという技術開発、今の組織でいいますと、個別技術の開発をやらざるを得ない立場にいますと、総合化とかシステム化の手法を、今、西部さんが言われたように、地についた格好でシステム化していく手法が、そういう手法の開発の研究部分、そういうところが立ち後れているという感じがします。今後そういう畜産そのものを支えていく技術開発の段階で、どういう方向で、まあ僕は総合化手法みたいなものを日本ではというか、世界的に欠けているのではないかという感じがしました。その辺についてコメントかサジェスチョン頂ければ有難いんですが、お願ひ致します。

座長（西埜）：先生方お願ひします。

宍戸：西部さんの最初のお話、その通りなんで、実は生活と農業というもの、農業技術といいますか、農業、畜産というのが生活との絡み合いで成り立っている。むしろそこを昨日から水間先生も天間先生もおっしゃったし、そこが段々

いろんな意味で離れていかざるを得なくなっている。そういう所で、実はどうするんだという大事な話がある。その辺まだ水間先生にもう少しコメントしていただければと思っています。それから伊藤部長のお話ですけれども、私、天間先生の話の中で、究極の技術というのはなくて、場合場合によって技術というのは使い方が変わってくるんだという話、ちょっとあれは私誤解を招くような気がするんですけど、いわゆる個別技術というのと、それをどう組み合わせるのか、その組み立て方によっては非常に対応性がある。それはいいんですけど、その基となる技術はそれなりに必要なことで、それはやっていってもらわなきゃならない。まだまだこれから沢山あるだろうと思う。問題は、それをどういう形で経営の中にもっていくのか。これを伊藤部長はシステム化ということまでひとくぎりされたので、それはそれでいいんだけど、誰がそこをどの場所でどうやって実証していくかという具体的な方法論が今なかなか確立されていない。誰がやるのか、農研センターがやるのか、北農試か、道立農試か、大学か、あるいは農協がやる、普及員に任せる？具体的に考えていくと、意外にやっかいな問題があって、今まで北農試の方が特に苦勞されているのは、そこをどういうふうに突破していこうか、道立の人達と一緒にやっていくか、その辺りの具体的な方策というのは、やっぱりなかなかいろんな壁とか、組織上の問題があってできなかった。だから、伊藤部長がいわれたような方向はいいんで、そこをなんとか実際の動きの中で示していただければそっちの方が有難いと思っています。

水間：西部さんのお話は本当に問題の本質をおっしゃったんだと思います。今度の新農政プランの中には、組織経営体とか個別経営体とか、

法人化することによって、例えば後継者、休みをとれない、企業性を発現できないということ、を、法人化することによってできるであろうということは、昨日天間先生が解析された通りだと思うんですが、私はもっと根本的にいいますと、今、鶏や豚で進行しているような事は、酪農などでは進行してもらっては困るとおっしゃられたんですけど、まさにそうなんです。そういう中で、担い手をどうするか、後継者をどうするかといったときに、家族協定農業といったものを申し上げたわけでございます。それは、やはり家族経営というものを基本に据えていくという形でない、これからはうまくいかないであろうということが一つあったからなんです。では、その家族経営をどううまく展開できるかといったときに、今のように後継者がいろんな権利も何も保証されない、また、婦人が全くそういう事を保証されないといった状況のもとで、そういうものを実現していこうとしてもうまくいかない。そういう事を昨日少し申し上げたつもりです。

もう一点は、私は集約的な畜産というのは条件を設けなければいけないのではないかと、日本の場合、条件を設けようということ昨日申し上げたんでございますけれども、例えば昨日天間先生もお話になりましたけど、5大湖近辺の家族酪農経営というのは50頭規模だと、それから酪農の新天地であるカリフォルニアだとか、南部、中西部の酪農規模は500頭くらいになっている、それがお互いに共存できているじゃないかとお話になられましたけど、アメリカの中では、実際的には大規模の方が有利ではないかという議論が強くなっているようなんです。但し、その条件として問題になるのは、環境問題という事がネックになって、大規模だけがうまくいくということにはならないわけです。そういう問題は、日本ではもっとシリアスに出てくるの

だろうということです。それから昨日天間先生おっしゃったんですけど、例えば80頭規模の搾乳牛でいくと、1万2-3千戸で大体今の酪農は間にあってしまうのではないかと。養鶏でも養豚でもそういう事が盛んに議論された時代があったわけです。家族的な養豚、養鶏経営がほとんど無くなっていいみたいな話をしたわけですけど、決してそういうことが良いのではないと私は思っている。ですから、昨日そういう集約的な経営と家族複合経営あるいは地域複合経営の住分けということを申し上げたわけですけど、今日、そういう考えを西部先生に補足して頂いたと思っております。

座長 (藤田) : ただいままでの御発言、御提言に対しまして、フロアーの方からご質問、ご意見等ありましたら伺いたいのですが、お手をあげていただければ。

朝日田 : 今の議論は総論的になりまして、総論的なところでは、先生方のお話ごもっともで、私反論いたしませんし、賛成でございますが、一つ総論的なところで私たちが本当に考えなければいけないことは、これは畜産だけじゃありません、今日は畜産学会ですから学会的な立場で、学問としてどう持っていくかという立場での議論を、総論の中では取り込むべきだと思うんです。ということは、近代化ということが明治維新になって、それで畜産が戦後に定着したといいながら、僕は今こそ反省すべき時だと思う。近代化というのは、キリスト教的背景を持ったヨーロッパ、アメリカの技術であり学問に無反省に我々は従ってきたということ。まず僕が言いたいことは、そういう欧米の科学技術なり学問の考え方を日本的なものに反省すべき時、つまり日本は東洋でありますから、東洋的な哲学の背景の中で学問は伸長すべきだと。これは

畜産だけじゃありません、全てです。で、それは日本が東洋であると言いました。特に日本の場合は、明治維新という輝かしいエポックがあったわけですね。ところが、その前に何があったか。江戸時代です。僕は江戸時代を評価すべきだと思う。江戸時代270年という歴史があって、世界に270年の平和があったということは、これは世界の歴史の中でどこの国にもないわけです。明治維新で江戸時代を徹底的に悪者扱いしたわけです。我々もそういう教育を受けました。しかし、本当はそうだろうか。そうではない。江戸時代があったからこそ明治維新の花が咲いたわけです。だから、僕は改めてきつい言葉でいうならば、新鎖国をやるべきだと思う。江戸時代の鎖国といったものは決して本当の鎖国ではなかった。ちゃんと学問の導入をどんどんやっていたわけです。そして、スクリーニングをかけて、「江戸のルネッサンス」という本が最近でましたけれど、江戸の文化を作ったわけです。しかも決して産業革命に劣らないものを作っていた、個々の事は言いませんが。そういった欧米偏重のキリスト教的背景を持った学問をもう一度反省すべき時じゃないかというのが、総論としてのコメントというか感想です。

座長 (藤田) : 有難うございました。昨日天間先生が御提言になりました新農政プランに対する北海道酪農自体の中での反応ということについて、少し現場的な、ただ今の朝日田先生の発言の主旨にはちょっとはずれるかもしれませんが、現場的な考え、現場でどういう反応があるかということについて、コメントを頂きたいと思えます。例えば、昨日の新農政プランの中のポイントの一つとして、市場原理、競争原理の積極的な導入ということがあるわけですけど、従来の農協の立場、あらゆる階層の共存、共有、共栄的な立場を保持するという、従来の農協の

考え方とどういふふうに調和させていくんだろ
うということで、ちょっと問題が生じそうな気
もするわけです。それは例えばの話ですけど、
そのことも含めまして、農協の考え、現在どう
いふふうに考えているのかということについて
御発言を頂きたいと思ひます。今回の北海道畜
産学会の受賞グループの中に属しておられます
十勝農協連の西部さん、もし何かコメントがあ
ったら頂きたいと思ひます。

西部(十勝農協連)：昨日遅れて参りましたので、
実はそこら辺の議論の所はなんとも申し上げら
れないのですが、ただ、農協といひますか、私
たちが今、日々あたっております現場からみた、
一つの考えといひましようか、例えば競争原理
の導入といったこともござひますけど、これは
全体がそう考えているかどうかわかりませんが、
私個人的な考えから申し上げますと、全部100%
みんながうまくいくという方法は、残念ながら
今の所無いというふうに考えます。例えば、内
側から見た農協というの、ある面では自分の
努力がそれほど完全ではなくても、全体がうまく
いってればかなり良いところまでいくんだ、
という考え方が一方であるわけです、現実問題
として。

これは私たちがこれから、例えばこの先5年、
10年あるいは20年、50年を考えていったときに、
こんな姿でいったい我々の農業あるいは畜産が
進んでいけるんであろうか、という気が非常に
するわけです。つまり、それは競争と呼ぶか、
別の言葉で呼ぶかはわかりませんが、それぞれの
家族経営にせよ、法人にせよ、それぞれの経
営自体は最高の能力を発揮しなければならない
という立場におかれていひ思ひます。ですから、
当然我々の職業に向き不向きがあるのと同じ
ように、極端な言い方ですけど、例えば農
業の形にも、ある人には向いていひる形がある、

あるいは別の人には向いていひない形が当然有り
得ると思ひます。ですから、画一的な、こうい
う方向に進むべきだ、あるいは、一つの形がで
きあがって、そこにみんなが向かって進むべき
だということにはならないであらう。もう一つ
は、現場から眺めたときに、今まで進んできた
進み方どおりのままでは、この先は進めないで
あらう。つまり、もう少し、競争と言へば表現
が悪いんですけども、切磋琢磨できるような
形の進み方をしないと、みんな共倒れになっ
てしまうんじゃないだろうか、というような感じ
を持っていひるわけでござひます。

座長(藤田)：有難うござひました。では、続
きましたただ今までの発言に対して、フロア
の方から御発言頂きたいと思ひます。ただ今の
農協の立場、現在の立場ではおそらくあまり明
確な、まだ6月の提示から間もない時期でも
ありますし、はっきりしたことは言へない事情も
おありになりますでしようが、農協の立場とし
ては、多様な形の存在が望ましいというコメン
トがござひました。これについて、農協はこう
あるべきだというような立場からの御発言があ
れば頂きたい。ありませんようですので、引き
つづいてまた別の方のコメントを頂きたいと思
ひます。

座長(米田)：あまり時間もなくなってきたわ
けですけども、道立の農業試験場、畜産試験
場では、宍戸先生から御指導あつたように、技
術開発ということでは個別の技術開発を進めて
きたいきさつが非常に今まであつたわけだけ
ど、御指摘のあつたように、総合化、システム
化していく技術、組立がなかなかうまくいかな
かつたといひたことがあひます。宍戸先生から
7・7・7の運動という話がでまして、7000kg、
70頭の問題を含めて、草の生産からいひると、難

しいんじゃないかということ、それから、労働生産性の面を強調されまして、イギリスとの比較なり、オランダとの比較もありましたが、低コスト牛乳の生産に向けてのいろいろな技術開発を行ってきた道立の機関として、今回畜産試験場の研究部長さんが見えられておりますので、労働生産性でも結構ですし、糞尿問題、または、宍戸さんから御指摘あったようにですね、北海道の放牧の割合が減ってきているというような技術問題を含めてコメントを頂きたいと思いません。労働生産性では、省力化技術なり、経営の分業化に向けてのいろいろな問題があるかと思えますし、環境保全をやっている農業試験場もごぞいますし、飼料生産の面でも技術開発をやっているところがあると思えますので、まず最初に指名して申し訳ないんですけども、新得畜試の所部長から、どの点でも結構ですから、ご意見なりご質問なりのコメントを頂きたいと思えます。宜しくお願ひします。

所（新得畜試）：昨日、今日と先生方のお話をきいて、私もいろいろ考えてみても、どうお話しすれば良いのか、整理のつかない状態ですけども、実は、道としても、新農政プランについてそれなりの検討をされておるようで、私ども道立の研究機関の中でも、畜産だけでなく、全てのものについて研究としてどういうこれに対するバックアップ体制をとれるか、あるいは、どういう課題をやるべきかという論議を続けているつもりであります。非常に難しい問題が沢山含まれておまして、なかなか整理がつかないという状況ですが、酪農の問題に限っていえば、酪農というのは御存知の通り、土、草、家畜、最後、生産物まで含まれて、非常に裾野の広い分野ですから、一つの技術を論議しても、それが宍戸先生の話にもあったように、総体としての酪農経営の中で、どういう位置づけにな

るかという問題を考えるときには、とても飼養技術とか育種技術といったものでは計り知れない問題がある、ということで、実際には、機械とか農業経営の立場の方と話を進めているような状況です。そんなことでおそらく座長から何かコメントを出せということだと思いますけれど、あまりそういう立場を考えないで、学会の場ですので、私個人的なことで受け取っていただくということで1つ2つ質問をさせていただければと思っております。

1つの問題は、やはり北海道の持てる条件、我々の持てる条件を最大限に発揮させるという意味では、やはり粗飼料生産、この自給飼料、粗飼料という言い方を止めて自給飼料という言葉にしたいと思えます。粗飼料というと何か非常に質の低い飼料に受け取られるから、そういう言葉を止めた方が良いんじゃないかということを前にいわれたことがありまして。自給飼料の生産を、低コストで如何に高品質のものを作るかということが、1つ大きな問題としてあると思えます。これに我々はどういう関わりを今後研究としてもっていけるか、という問題、これは特に英国の場合とか、デンマークの場合と比較して、日本の場合、まだ低位水準にあると、昨日お話を伺いました。これは私もうちょっと中身の問題を細かく検討して論議してみないとならないのではないかと思います。意外に北海道は、自給飼料を作って生産性を高めるということは、総論的には言ってるけれども、各論的には意外に吟味されていないことじゃないか。例えば、収量の問題一つとってみても、本当に3tということはありえないと思っているんですけど、平均的には3.5tとか言ってますけど、実際、篤農家と言われる方の所へいきますと、そんな生産性の草地はない。もっと高い生産をしているということが実際あります。それから私が若干心配しているのは、できあがった粗飼

料の質的な問題、例えばホクレンの総合研究所が分析した値を見ると、高泌乳牛では、大体64-65%ぐらいのTDNの粗飼料を作ることが必須だと言われている割には、実際の分析値を見て60%以下が非常に多い。この辺りの事をもう少し細かく検討してみなければならないということを考えている。その辺で、外国の場合とどういふふうに違うのか、もう少し具体的なことを教えて頂きたいというのが一つです。

それから、労働生産性の問題は、私もまさしくそのように考えますし、日本の農業、畜産を含めて、労働時間を短縮するということが、とかく労働的にきつい仕事、汚い仕事を省略する、なるだけ機械化するという事で進んできたのであって、あまり労働生産性の問題として捉えていなかったんじゃないかという指摘というのは、私もそういう感じが致します。というのは、畜産にしても、農業にしても、家族経営の場合、労働時間というのは、労働費というのは、ある意味では費用ではあるのですけれども、実際の場合には、これは自分の、不思議な計算をして、所得というものになっているんですね。そうすると、昨日もちょっと先生が言われましたように、ある意味では少し時間をかけてもそれで少し生産性が上がれば、その時間の分はコストということにはなるんだけど、最終的には自分の懐に入ってくるもんだ、そういう考え方が長く続いていて、企業経営におけるような労働生産性の問題としては、私たち自身も、あるいは実際の生産者もそれほど強く感じていなかったんじゃないのか、そんなような気がします。その問題は、まさしく今これからの法人経営、法人経営というのは全て企業経営をさしているのではなくて、共同経営のようなものを含めてだと思えますけれども、そういう場面では、当然の事ながら、そういう所得的な考え方でなくて、労働時間、労働費というものを完全に費用とし

て考えるという視点が必要となってくるだろう。そういう意味では、省力化の問題はもう1回もう少し綿密な意味での省力化の問題を考えてみる必要があると思う。その発展方向の中には、我々もパーラーシステムとかフリーストールシステムという問題を当然想定はしたのですが、昨日常間先生の話では新たにこのシステムを取り入れるとすると、かなり多大な投資をしなければならない。この投資を、実際問題として、今の生産者の段階で、どうやって実現していくのかというのは、もっと大きな問題を含んでいるということで思い悩んでいるところであります。

もう一点は私も全く総合化の、これは研究の場面でいったい総合化の研究、プロジェクト研究といったものを、どこがやるのか、どういう形でやるのかといった非常に難しい問題があると思います。けれど、やはり研究の場面では、その辺りの問題を真剣に取り組みざるを得ないだろう。そこに一つの解答を、私たちが生産現場になんらかの解答を出せるとすれば、土から始まって生産物までの間の総合的な視点での研究というか、整理をしていく、そういう作業を、今、我々研究者がある程度取り組むことの一つであろうというふうに、私も全く同感に感じております。

最後にもう一つ、非常に私ども行政の人と話して出てくる話題は、農業を、酪農を魅力あるものにする、どういうふうにすれば魅力あるものになるのだろうか、喜んで酪農をやりたいという人が増えるような、そういう技術体系というのはどういうふうに作っていくのか、それに関わるような技術を研究してほしいというような話がよく出てくるわけです。それは一つは農業経営者像の所で昨日お話をしましたが、やっぱり農業、酪農にしてもなににしても、他産業並みの労働時間で、他産業並みの所得を確

保するというを、技術として目指せるのかどうかということ、そういう問題だと思います。非常に難しい問題で、とりとめの無い話ですけど、以上のような事を今、私個人として考えているということで終わりにさせて頂きたいと思っています。

座長(米田)：どうも有難うございました。その他にもご意見あるかと思えますけれど、この辺の技術開発の問題について、会場の皆さんの中から、先生方にお答頂く前に、もう一つこの点をつけ加えていきたいということがありましたら、ご意見なりご質問なり伺っておきたいと思えます。所部長が4点に絞られて話されましたし、粗飼料生産なり、または労働生産性なり、システム化なりということでもありますけど、その他つけ加えてご質問なりご意見なりないでしょうか。それじゃ時間の関係もありますが、では宍戸先生からお答を頂きたいと思えます。

宍戸：直接答えられるのは自給飼料の件ですけど、昨日ちょっと話しましたが、収量などについて、日本は全然問題無い、非常にレベルが高い、と評価されていて、むしろ、所部長も言われたように、コストというのは労働費をどういうふうに実際の懐勘定としてみるかということと計算上出てくるものとは感覚的にわかりにくいところがあるのです。ただ、コスト計算というのを厳密にやっていくとやっぱり労働費というのが出てくる。それにかかる労働費というのは、結構労働時間が長いということから、それを含めたコスト計算すると、高くなってしまふということが強く指摘されている。今言った生産力そのものについては、特に外国に勝ってはいませんが、ただ私が生産力の問題をあえて言ったのは、酪総研の中でやはり10ha当

たり6tぐらいの良質な粗飼料を作っていかなとなかなか、いわゆる70円ぐらいのコストのところへもっていくのは難しいんじゃないかということがあって、その辺の事をふまえて、さて実際の北海道、しかも草地を中心とした所で、これをどう具体的に考えていくのかなということを提起した。今、所さんが言ったように、私も北海道に来た時に、統計的な3tあるいは3.5t、実際に草を見ているとどうもそういう感じはしないんだけど、どうしてか統計でみるとそう出て来る。その辺の所を当時の農試の草地部の皆さんに、どうしてそんなに低いのかと聞いたときに、統計上問題があるということが一つ、草地の更新がなかなかうまくやっていないということがもう一つあるという話であったんですけど。いずれにせよ北海道で、今、所さんが言ったように、草というものをかなり重視した畜産になっている。土地利用型の非常に典型的なもの、そうしたらやっぱり草の持っている意味というものを再確認しておいた方がいいというのは当然ですけども、もう少し小さなコストになるものならしていったら良いんじゃないだろうか、そういう意味で話をしたわけです。

それから、予想的な研究、所部長の話で道立農試の中に土から家畜の生産まで一貫したものを視野にしていく考えを期待している、それは今後ともお願いしたいと思うんですが、ただ昨日も少しいったように、これから研究所は週休2日制とかになって、非常に実証的なことを含めての研究をやりにくくなって来る。特に畜産の場合にはそういう事をやりにくくなって来たというのが実態なんで、日本国全体の労働時間を短縮していくことは結構なんですけれども、正直なところを言って畜産研究の場所としてはなかなかつらいなあというのが正直で、これはこの場にいる人はお解りかと思いますが、そう

いう事が感じられました。

水間：先ほど朝日田会長さんから東洋的な新しい学問の展開ということで未来を切り開くべきではないかというお話がありました。まさにそういう事なんです、昨日も申し上げましたように、工業の分野では非常に日本の質的水準が高いということで、江戸時代以来の日本の教育の問題ということがあったわけですね。野麦峠という明治の女工哀史がありますけれど、そこに働く女工さん達が如何に教育のレベルが高かったということをすでに皆さん御存知だと思いますが、そういう中で追いつけ追い越せ、それは工業の分野では資本の投下、あるいは工場を持ってきて技術者を連れてきてということで追いつくことができました。それが日本の工業的な成功だと思うんです。農業の分野では畜産というのは外国から導入してきたものを、全てまねることがあったと思うんですけど、そこで本当のオリジナリティを發揮して日本の畜産、日本型畜産構築の課題の中に、教育問題とかあるいはオリジナリティのある研究をどう展開するのかということが今言われている。そういう時に、それぞれの研究者が自分の目先の事だけしか物事を判断できないようなものであってはならないということを申し上げたかったわけですね。そういう意味で、朝日田先生のご指摘は難しい事ではございますけれども、日本が今大切な成功をおさめて、基礎研究の分野とか、オリジナリティのある仕事において、今日本がトップを走ってさらにその地位を高めていくためには、ここで基礎研究を通して大いにその研究を發展させなければならないということが、今学術会議などで盛んに言われている問題であるということもつけ加えておきたいと思えます。

座長（西塾）：どうも有難うございました。そ

れでは時間が10分ぐらい遅れてもいいということですので、できるだけ、完全燃焼とはいきませんけれど、不完全燃焼程度の締めくくりはしなきゃいけないだろうと思います。いろいろ皆さんの意見を聞きながら、座長団の中で一番聞きたかったのは、やはり十勝農協連の西部さんの質問に関する事柄だったんですが、これは天間先生も言うておられますように、新農政プランにおける積極的育成処置を継続的にこずるとなると、まさに生産者に対するインパクトが大きくなる。大規模経営には希望をもたらす反面、中小規模経営には失意をもたらす懸念が存在するというふうになって書いている。これに関する事が西部さんから話が出たんですが、いうならば切捨てというふうになってしまう。その辺りをどう考えるか、いやそういう事態を避けるべきだ、それには技術開発をこずしなければならないというふうになってくるんですが、時間がないので、いつの機会かこの問題について討論をして一定の方向性を求めていければというふうを考えているわけです。

それでは、先ほど結論らしきものも頂いたんですが、何かまとめのようなものを朝日田会長の方から頂きたいと思えます。

朝日田：御指名なんです、私の立場は、締めくくりをするのは会長さんだと言われても、座長さんが締めくくりをされたわけですから、それで良かったと思うわけですが、せっかくですから一言申し上げたいと思えます。今回の特別講演的シンポジウム、シンポジウムの特別講演、これは「北海道畜産の未来を考える」というテーマで2日間にわたって3人の講師の先生にお願いし、天間先生は今日是用事があって不在でございますが、快くお引受け頂きまして、それぞれの、水間先生は総論的、宍戸先生は特に技術の問題に関して、それから天間先生は新農政

プランといったもの、それからトータルとしてこの総合討論で皆さんの意見の交換ができたということは、今までの北海道支部ではなかったと思います。そこで私の自画自賛でございますが、北海道畜産学会の発足にあたりまして、皆さん方の御協力を得て、まだまだ今座長の西莚先生もおっしゃいましたけど、まだ完全燃焼とはいきませんけれども、しかしながら問題提起としてかなり皆さん方がそれぞれ整理をされて今後の研究方向というものを整理されたのではないかというふうに思っております。

最後ですけれども、新農政プランの話がありましたけれども、これをうけて、今後おそらく酪農近代化、肉牛の近代化計画が出てくると思います。私は前回の北海道の近代化計画に直接携わりました。というのは、北海道の農業振興審議会の畜産部長でございました。次は、私は畜産部長を降りまして副会長なんですが、次のこの畜産学会の会長の三浦さんが北海道農業振興審議会の畜産部長でございます。おそらく今日の議論などもふまえて、次の酪農、肉牛近代化計画、おそらく次回に昭和60年度発足の70年ですから平成10年までになりませんが、見直しがはいてくると思いますので、一つ我が北海道畜産学会の会長が新農政プラン、イコールとは申しませんが、酪農近代化計画のまとめの大役をはたされるということを期待いたしまして、先生方三人の御礼を込め、また座長さんにも御礼を申し上げて、私のまとめというより、御礼を申し上げて最後のご挨拶といたします。

座長（西莚）：どうも有難うございました。それでは座長の方からまとめがありまして、一つは言ったわけですけど、メインテーマで「北海道畜産の未来を考える」、未来という例えばなしでしたら終着駅が決まったわけです。昨日今日の特別講演を通じてレールが敷かれた、その

レールの上を特急を走らせるのか、鈍行を走らせるのか。そして機関車は馬鉄なのか蒸気機関車なのかあるいは近年の電気機関車なのか。そして酪農家というお客さんを乗せて未来に向けて北海道の畜産はこれからスターとしていかなきゃいけない。その時に皆さん方は北海道畜産の頭脳集団として機関部となり、そして乗せるお客さんはもう決まっているわけですから、馬鉄にするのか蒸気機関車にするのか電気機関車にするのか。これを決定するのは、本学会の会員の皆様の、北海道畜産における頭脳集団である皆様の責任であると痛感しているのでございます。これを座長団からのサマリーにしたいと思っております。先生方、大変有難うございました。

